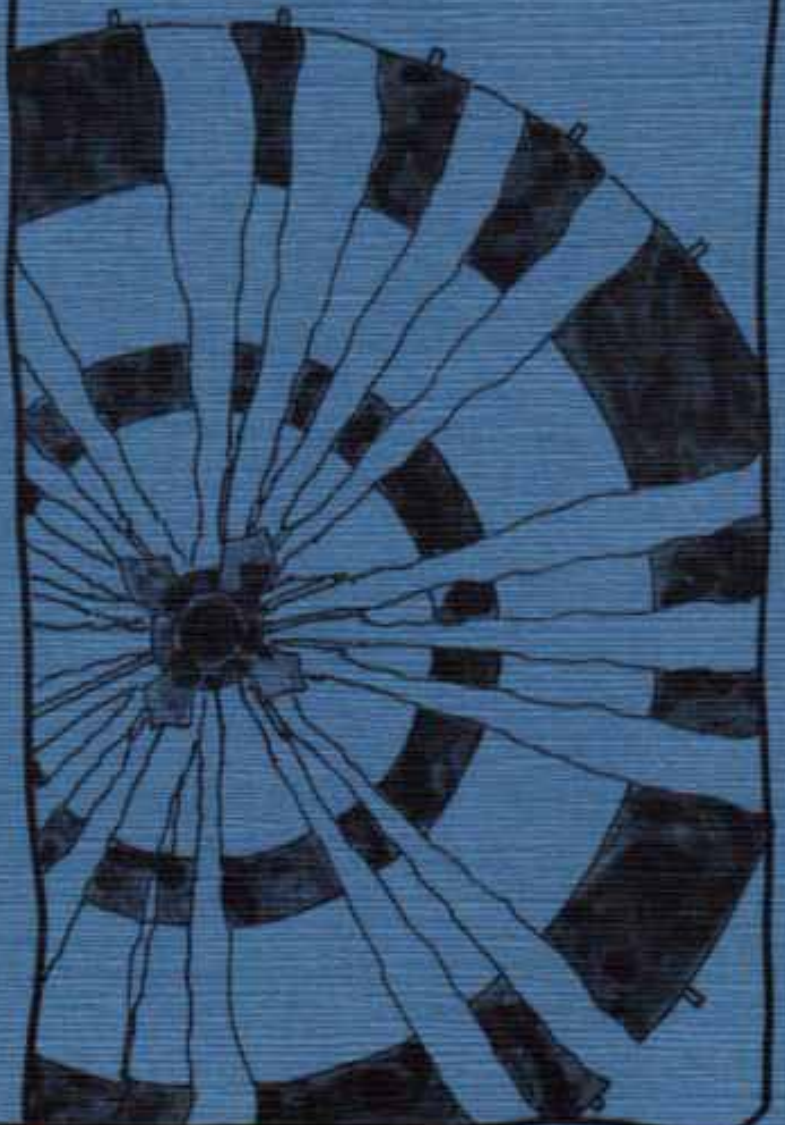


やぶれ傘



二二七号
二〇一三年八月

釣台の方へゆく徑草いきれ 根橋玄次
 空蟬のどこかへ消えてしまつた日 きくちきみえ
 小判草川の向うでへり離陸 大島英昭
 まだ空の少し明るく初燈 青谷小枝
 小流れにトマトを冷やす茶店かな 廣瀬雅男
 さくらんぼのペアーが多い午後のお茶 辻久保 勲
 ロボットがくつたりとする夏の果て 小山よる
 夕月が黄色くくなつて蚊食鳥 藤井美晴
 傳次郎の壺持つ写真青嵐 瀬島酒望
 畑道に土ほこりたて夕立ち来る 白石正躬
 短冊を食み出る児の字七夕竹 渡邊孝彦
 菜園にかがみて茄子の花ながめ 秋山信行
 縁側の靴脱ぎ石や雲の峰 天野美登里
 青芝に玩具ひとつが残されて 有賀昌子
 公園は夾竹桃に暮れゆけり 安藤久美子

抄 集 句 傘 大 崎 夫 選

雨ぼつと鬼灯市の帰りしな 木村瑞枝
 白シャツの行列昼の弁当屋 倉澤節子
 雑草も我が家のたから夏の庭 黒澤次郎
 星涼し誰も渡らぬ歩道橋 小泉里香
 カーナビが「道なり」と言ふ風は夏 柴崎和男
 雲厚くなりて卯の花腐しかな 萩原溪人
 この猛暑口数減つてくる家族 萩原久代
 スカイレストランの絶景けふる驟雨かな 箕田健生
 青田風たも持つ子らの駆けてゆく 村田 武
 梅雨あがる夫の散歩は六時から 森 美佐子
 鳩時計聞きつつ日覚む涼新た 山本久枝
 麦の穂の先を帽子の列が行き 石原健二
 「男性用日傘あります」との楷書 岩藤礼子
 地団駄を踏んで泣く子の夏帽子 江口恵子
 糠漬の手はずはよろし茄子胡瓜 奥田温子

西 日

大崎紀夫

晴れわたる日のひまはりのうしろ側
やんですぐまた雨となる夏つばき
川岸の草どこまでも刈られぬる
水にほふかに水打つてありにけり
駅前 バスの運転手に西日

日盛りの空地に杭を抜きし穴
さるをがせ緩るるを眺めをれば雨
氷旗だらりと猫は木の下に
ひとりふたりが箒木に触れてゆく
草いきれこれより道は木道に
四つ角を左に曲る夏つばめ
ひまはりの畑のそばでバスを待つ

草いきれ

根橋宏次

釣台の方へゆく徑草いきれ
洗鯉明るいうちに雨あがり
履物が次第にとほくなる跣足
川風の夕風となる夏祓
水門へもどつてきたる蚊喰鳥
伸び過ぎの草を見てゐる夕端居
水は湯にほつたらかしの浮いてこい
次の葉につかまり直す糸とんぼ
舟虫のゐる岸壁へくるフェリー
踏切の鳴りはじめたる日の盛

空蟬

きくちきみえ

梅酒の瓶去年の瓶の隣へと
四葩色づく魚屋の日曜日
ごきぶりへテレビの明り届きたり
残りしは柄の取れてゐるさくらんぼ
かき氷静かな午後となりけり
夜濯ぎのズボンのポケットにマスク
噴水にさきにくいてゐる鳩雀
車窓より夕日ときどきビルディング
空蟬のどこかへ消えてしまつた日
飛行機を見るに日傘をずらしをり

小判草

大島英昭

かうほねを少し遠くに見るルート
馬鈴薯の花咲く野菜ゴミ捨て場
降りさうなままに暮れゆく百合の花
小判草川の向うでへり離陸
午後五時のチャイムたうもろこしの花
炎昼の農家の庭にミニバイク
戻り梅雨テニスコートに鳩降り来
夕方の畑に人ゐる独活の花
ひまはりの前はどぶ川パリー祭
どぶ川の草のあたりか雨がへる

初螢

青谷小枝

まだ空の少し明るく初螢
雑魚をとる小舟が雨に蛭蓆
結界は竹あぢさゐは青ばかり
端居して書評劇評ひろひ読み
幾度も数へて五匹目高の子
土手にゐるちりんちりんのアイス売り
駄菓子屋にめぐりくじ引く日焼の子
雨止んでオクラの花が今朝三つ
煮くづるまで煮て茄子のポロネーゼ
いきつけの飲屋のメの冷さうめん

トマト

廣瀬雅男

桜葉降る公園のすべり台
紫陽花に雨後の日差しのありにけり
農小屋の屋根這ひ登り南瓜咲く
支へ木の高さまぢまぢ胡瓜咲く
桑の実や戦時の頃の話など
音の無き流れに咲けり水芭蕉
葎切の声に暮れゆく流れかな
五月晴れ少し早足にて歩く
海月浮く水上バスの船着場
小流れにトマトを冷やす茶店かな

蝙蝠

丑久保勲

そこここに筍掘りの跡の土
食卓に小壺梅干し五六粒
収集車の壘缶の音ハナミヅキ
掲示板に新しき紙立葵
区役所へ横から入る雲の峰
さくらんぼのペアーが多い午後のお茶
四半分の西瓜を入れてレジ袋
声を出す野球練習日の盛り
社家の角曲がつてすぐの杜若
蝙蝠が高架下より飛びだして

夏の果て

小山よる

休日の床屋の前に四葩咲く
のど飴をつると飲み込む夏の風邪
子燕の四羽ぴつたりくつつきて
夏の夕雀次々飛んでくる
日傘にて相合傘をしてゐたり
目が覚めて夢の世界の汗をふく
梅雨寒の財布にやたら五円玉
マスクふと外せば夏の夜の匂ひ
かはほりの空に小石を擲つて
ロボットがぐつたりとする夏の果て

蚊食鳥

藤井美晴

夕月が黄色くなつて蚊食鳥
雪溪を懺悔懺悔と登りゆく
蒸し暑い夜のアマリア・ロドリゲス
馬術部の厩舎のにほひ茨咲く
カフェ暗く涼しくダミア流れゐる
泥沼は干涸びかけて蒲の花
一面のサルビアに雨降り注ぐ
赤い月ニセアカシアの花が降る
自転車のスポーク光る夏の雨
腕を這ふ山蟻ふつと吹き落とす

炎天

瀬島洒望

梅雨来る山積みされし古タイヤ
駆け出しの画家の絵売られ日雷
相客は田植糸済んだと露天風呂
跡目継ぐ三男坊が田植機に
傳次郎の壺持つ写真青嵐
寝ころんで天井の蠅見てゐたり
アメリカンチェリー頬張り叩くキー
明け易しラジオを点けて二度寝する
足元を確かめ百合の写真撮る
炎天を鳶が飛んでゐる波止場

夕立ち

白石正躬

鏝阿寺の見える裏山若葉風
柿若葉雨を垂らしてをりにけり
梅雨ぐもり朝から騒ぐ鳥二羽
柿の木の下どくだみの花盛り
じやがいも掘り手拭濡らし顔を拭き
土手下で入院話夏燕
じやがいもの小粒を集め猫車
雨傘で日除けをしたるトマトかな
いんげんの花咲くそばを通りけり
畑道に土ぼこりたて夕立ち来る

七夕竹

渡邊孝彦

姫女苑レール積まれし線路脇
ビルの上だけ見えてゐる茂りかな
梅雨晴の路に飛ぶ影見れば鳩
公園の子の遊び上手や五月晴れ
枝川が出合で淀み夏の蝶
濡れ残る鉄砲百合に午後の日が
50てふ道路標識風死して
赤四手の木立に雨後の蟬時雨
波の向き夜風に変はり来るプール
短冊を食み出る児の字七夕竹

茄子の花

秋山信行

西に星でてゐて北に稲びかり
花は葉に砂場に人の無き真昼
夏夕べ手垢まみれの父の辞書
落ち水に向きを揃へるメダカの子
夏草の刈られて野辺の真つ平
菜園にかがみて茄子の花ながめ
風の向き変はり始める花あやめ
畑への道はひとすぢ合歡の花
なんとなく水のにほへる五月闇
腰かがめ浜屋顔をながめやる

雲の峰

天野美登里

お見舞ひの熨斗袋書きさくらんぼ
教会の塔を遠くに綿の花
田に水を入れる日の朝雲重し
短夜の門は錆びたる鍵のまま
梅雨空をうつす流れを鯉濁す
スニーカーを洗ひたる午後青葉潮
梅雨明けの川原の猫はのびをして
単衣脱ぐ厨の水を流しつつ
縁側の靴脱ぎ石や雲の峰
羅の人を追ひこす石畳

青芝

有賀晶子

薄暑光回転ドアに人が消え
若葉光大きくうねる鯉のゐて
青芝に玩具ひとつが残されて
濃山吹ご詠歌聞こえるお寺
無造作に足を組む人夏はじめ
蜘蛛の囿のべたりと髪に木下闇
追ひかける騎手が鞭打つ五月晴
眼鏡拭くクーラー効きしバスを降り
干し物の手を止め四十雀さがす
嬌声が柘榴咲く路抜けてゆく

